



図書館（大正13年卒業アルバムより）



色内通り 右の建物が多喜二が就職した旧北海道拓殖銀行
（大正13年卒業アルバムより）

特集 小林多喜二 takiji kobayashi

多喜二と小樽

小林多喜二（1903 - 33）は、小樽高等商業学校つまり小樽商科大学の前身校に、大正10年（1921年）に入学し、大正13年（1924年）に卒業した。ちょうど3カ年在学した。これについては、拙書『小林多喜二伝』（論創社、2003年）で詳述したので、それを読んでいただくことにし、そこに書かれなかったことを少し入れながら、再論する。

小林多喜二は、高商のすぐ下にあった庁立小樽商業学校から、競争試験でただ1人、小樽高商に合格した。1人しか入れなかったのは、同商業学校でストライキがされたからであった。彼は商業出なので、科目としては英語と数学が少し多く、簿記など商業科目の少ない、Dクラスに入った。

小林多喜二は、高商に入って本格的に文学をやりだした。商業学校時代の友人たちと文学サークルを作り、絵を描いた。絵は高商時代も続けた。

学校の月謝は伯父が出した。しかしその代わり、パン屋と工場を営んでいた伯父の家で住み込みで働くことになった。ただし高商一年の途中には、実家へ戻った。

大正10年の秋に、彼が1年生の時、初代校長渡辺龍聖が退任して小樽を去り、教頭格の伴房次郎が第2代校長になった。大正デモクラシーの時代が及んできた。

彼が二年生になると、同じ庁立商業学校からの、かつての親友・同級生たちが沢山入学してきた。片岡亮一などである。また伊藤整も小樽中学から入学してきた。

多喜二は、『校友会誌』の編集委員をし、近代劇研究会を組織した。そこには、乗富道夫や福田勇一郎がいた。学生寮の福田の部屋で、その会は行なわれた。

乗富道夫は当時、先鋭的であった。そして多喜二に影響を与えた。乗富は、同級生では多喜二と一番親しかったと考えられる。乗富は、明治35年9月11日の生まれで、原籍は福岡県である。士族であり、大泊（コルサコフ）にあった樺太中学校を大正9年に卒業した。普通、豊原中学であるとされたが、間違いであった。それは本学所蔵

の学籍簿で確認できる。その1年後、大正10年に試験検定で小樽高商に入学し、多喜二と同学年になったのだった。そして大正13年に多喜二とともに卒業した。福田は後に朝日新聞の社長になった人である。

多喜二は思想的には、乗富と並んで、下級生の斉藤磯吉、寺田行雄から影響を受けた。

多喜二は二年生から第2外国語としてフランス語を選んだ。だから彼は英語とフランス語はできる。三年生の時に恒例の外国語劇に出演して



多喜二が編集委員をした「校友会誌」（左）と、多喜二の書きこみが見つかった「改造」。
（本学図書館所蔵）